12/29 朝日

沖縄の声 振り絞ったのに

名護出身の学生「おかしいと思う私、おかしいのか」

「最後の手段」とされる代執行に、日本政府が踏み切った。30年近く混迷を続ける米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の返還・移設計画。沖縄から、本土から。歴史的な局面にどんな景色が見えるのか。

▼1面参照

キャンドルと金網

名護市の自宅から車で15分。物心がつくころには毎週土曜の夕方、その場所でキャンドルをともし、30分だけ、道行く人に手を振るのが習慣になっていた。

共働きの両親と、五つ年上の兄と双子の姉。渡具知和奏さん(21)にとって、家族5人で過ごせる大切な時間だった。

周囲には父よりもはるかに背の高い、金網フェンスが続いていた。成長とともに、その場に立つ意味を自覚した。中学生になると、周りと自分を比べては、考え込んだ。好きな子や友達が乗った車が目の前を通るのが気まずかった。「何であんなことをさせているんだ」と母が周囲から、とがめられたと聞いた。

高校生のとき、何のために続けるのかと父にたずねた。

母が兄を身ごもったとき、地元に米軍基地を移す計画が持ち上がった。父は住民投票の実現に奔走。反対が過半数となったが、当時の市長は受け入れて辞任。反対の声を上げ続けるなかで共感を広げたいと始めたのが、移設先の海に近い米軍キャンプ・シュワブのゲート前に立つことだった。キャンドルに込められていたのは、平和を絶やさないという願いだった。

「お前たちの未来を守るためだ」。そう力説する父が誇らしく思えた。

進学で大阪へ。一人暮らしを始めたまちに、米軍機の轟音は聞こえなかった。事件事故など毎日のように流れていた米軍関連のニュースを見ることはなく、基地が話題になることもなかった。

帰省のたび、本土との差にめまいがした。小さな島に基地が集中する理不尽さ、その中のたった一つの基地をなくすために、同じ島の中で海を埋め立てる不条理――。

就職活動のインターンで基地をテーマにした番組を制作した。全国の米軍専用施設の7割が沖縄に集中している。そう説明すると、同じグループの4人は「7割も？」と目を丸くした。基地が身近になければ、考えることがないのは自然なことだとは思う。でも、「素通りしても生きていけるということなのかな」。家族の歳月を思うと、やるせなさがこみ上げた。

県民投票無視され

2019年。県民投票が実施され、埋め立てに7割超が反対という結果が出た。今度こそ声が届く。期待は大きかったが、翌日も工事は続いた。「これだけの声が集まっても無視される。怖い」

政府は代執行に踏みきり、新たな工事が始まろうとしている。家族の小さな営みが始まって20年近くが経った。両親は還暦を過ぎた今もゲート前に立ち続けている。兄や姉は沖縄にはいても実家を離れ、立つことはまれになった。

自分は帰省して時間があれば、立ってみる。あの日々は何だったのか、と自問する。沖縄を諦めの空気がますます覆うのもわかっている。民主主義とは国民の意見を聞くものだという、教わったはずの当たり前がかすみ、不安にかられる。

「おかしい、と思っている自分がおかしいのかな」

この声を、これから誰にどう届けたらいいのか。今はわからない。

（棚橋咲月）

家族と一緒にキャンドルをともす7歳の頃の渡具知和奏さん（右から2人目）＝2009年、沖縄県名護市の米軍キャンプ・シュワブゲート前で

渡具知和奏さん＝26日、沖縄県名護市辺野古

和奏さんの歩みと沖縄で起きた出来事

- 2004年 普天間飛行場に隣接する沖縄国際大に米軍ヘリが墜落／渡具知さん一家が辺野古でキャンドルをともし始める
- （和奏さん2歳）
- 06年 日米が辺野古沿岸を埋め立てる現計画に合意
- 08年 北谷町で海兵隊員が中学生を性的暴行
- （小学校入学）
- 12年 本島中部で米海兵隊員が女性を集団性的暴行
- 13年 1月、全首長の署名が入った県内移設断念を求める「建白書」を安倍晋三首相に提出／12月、「県外移設」を公約した仲井真知事が埋め立て承認
- 14年 知事選で「辺野古移設阻止」を掲げた翁長雄志氏が初当選
- （中学校入学）
- 16年 4月、元海兵隊員の軍属がウォーキング中の20歳の女性を殺害／12月、普天間所属のオスプレイが名護市の浅瀬で大破
- 17年 10月、東村高江で、普天間所属の大型輸送ヘリが不時着し炎上／12月、普天間第二小学校の校庭に普天間所属の大型ヘリの窓が落下
- （高校入学）
- 18年 6月、名護市の農業小屋で、窓ガラスが割れ米軍の銃弾が見つかる／8月、翁長氏死去に伴う知事選で、後継の玉城デニー氏が初当選／12月、政府が土砂投入開始
- 19年 辺野古埋め立てを問う初の県民投票で、「反対」が7割超
- （[illegible]大阪へ）
- 22年 知事選で玉城氏が再選

私たちの問題 反応の薄さ怖い 作家・あさのあつこさん

1954年生まれ、岡山県美作市在住。「バッテリー」で野間児童文芸賞受賞。近著に「野火、奔（はし）る」。

昨年、家族旅行で沖縄に行ったとき、中学生の孫から尋ねられました。

「なんで、こんなにフェンスが続いているの？」

米軍基地のフェンスのことでした。約10年前から毎年、家族で沖縄を訪れてきましたが、孫の質問にきちんと答えることができなかった。少しずつ考えてきたつもりでしたが、なぜ、そこに基地があるのか。いま、沖縄で何が起きているのか。すぐに正しく答えることはできなかった。

そんな私が2018年の暮れに、朝日新聞の取材に話したのは次のようなことです。

〈沖縄と同じ、一地方で生きるものとして、とても怖い。私の住む岡山で何かあったとき、私たちの声を国がきちんと受け止めてくれるとは思えない〉

沖縄県知事選で、辺野古移設に反対する玉城デニー知事が当選した直後、辺野古への土砂投入が始まろうとするタイミングでした。あれから5年が経ち、代執行という事態を迎えた今、私が最も怖いのは、国民の反応の薄さです。これは一体何なのでしょうか。

沖縄の民意は民主的な手続きによって何度も示されました。でも、国はまるで頓着せず、対話した痕跡も残さないまま代執行へと突き進んだ。国は地方の声を無視してもいい、国民の声を軽んじてもいいと言っているのに等しい。大手メディアも含めて、この問題にどれほど深く、気概を持って切り込んできたのでしょうか。これは沖縄の問題ではなく、私たちの暮らしの問題です。それなのに声が上がることもなければ、議論も広がらない。

基地問題で声をあげることに多くの人はなじみがない。一票を投じたこともない。だから、落差を感じ、違和感を覚える。観光で沖縄に行けば、延々と続く基地のフェンスに驚く。でも、それもすぐに見慣れ「沖縄の景色」として受け止める。そして、沖縄だから仕方がないと、不可解にも割り切る。多忙な日常生活のゆとりのなさの反動で、沖縄はわがままだと攻撃さえする。

沖縄について、沖縄で起きているこの国の大切なことについて、国民がそれ以上知ろうとしないこと、無関心でいることが、代執行を進める政府を支えている。

民意が尊重されない国は、どれほど恐ろしいものか。私たちはそのことを実感できていない。鈍感に育てられてしまったとさえ考えてしまう。個人や地方、小さな声が国に伝わり、いかされていくのが民主主義の根幹です。この国に民主主義が根付いてこなかった。私も含めて大人たちは根付かせようとしてこなかった。その責任は重い。基地や原発でも、社会保障や税金のことでも。何かあったとき私たちは何を頼りに、声をあげていけばいいのでしょうか。

沖縄に一緒にでかけた孫にこれだけは伝えました。自分の暮らしや幸せを守ろうと思ったら、自分は何が嫌なのか、自分は何を望んでいるのか、ということを自分の言葉で言えるようになろうね、と。反対と声をあげることは怖い。でも、家族でも、近所の友だちでもいい。身近な人と「これはどうなっているんだろう」と話すだけで無関係ではなくなる。無関係でなくなれば関心を持つことができ、真実が見えてくると思います。

（聞き手・江戸川夏樹）